

## 演題名：検査からみる肝疾患の最新情報-ウイルス性および脂肪肝炎

氏名：古庄 憲浩

(施設名) 九州大学病院 総合診療科

ウイルス性肝炎において、持続感染するB型肝炎ウイルス(HBV)およびC型肝炎ウイルス(HCV)は慢性肝疾患の主因であり、同ウイルス感染者は、無症候のまま肝病態は悪化し、肝不全および肝細胞癌へ進展する。

近年の抗ウイルス療法の発展により、同ウイルスの制御が可能となってきた。HBV感染に対して、2000年以降、核酸アナログによる直接的抗ウイルス薬が実臨床で使用され、多くの活動性慢性肝炎、肝硬変の症例の肝病態の改善につながった。しかし、免疫抑制療法下での *de novo* B型肝炎という新たな問題が出ている。

HCVは、1989年に発見されたが、長い間インターフェロンを中心とした療法であり、その治療効果は不十分で、かつ、副作用の問題があった。しかし、2000年以降のHCVレプリコンの開発により、HCV感染増殖実験系が確立され、副作用の少ない直接的抗HCV療法薬が続々と生まれ、インターフェロンフリーの治療が中心となり、HCV持続感染の消失率(完治率)が100%近くまで可能となった。

このように、HBV感染の完全な排除に関しては課題として残るが、HCV感染症はその完全排除が可能となり、HCV感染が終焉を迎えようとしている。一方、HCV持続感染は耐糖能異常との関連がウイルス学的に証明されており、本来はHCV消失後に耐糖能異常は改善されるのだが、一部に耐糖能異常が残存し、非アルコール性脂肪肝炎という非ウイルス性慢性肝障害が散見される。

以上のような現状があり、今回、それらに対応するための臨床検査などを中心に報告する。

【連絡先】 福岡市東区馬出3-1-1-

TEL : 092-642-5909

e-mail : furusyo@gim.med.kyushu-u.ac.jp